

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

机の上の小さな大親友

小三・辻本 亜理彩

「あつ、そう太。また文ぼう具出しっぱなしよ。片付けなさい！」  
「えー。べつにいいじゃん。文ぼう具なんか」

ぼくはそう太。小学二年生だ。お母さんによく注意されるけど、なんで文ぼう具を大切に使わなきゃいけないんだ？ べつにいいじゃないか。夜だし、もうねよう。おやすみなさいーい。

「ふわー。おはよー。つて、え？」

ぼくは、思わず自分の体を二度見した。ぼくが：

「えんぴつになってるく？」

どうしてだ。どうしてえんぴつになっているんだ？ ぼくがパニックになっていると、三角じょうぎが歩いてきた。

「ちよつと、うるさいよ。ごきんじょさん」

「さつ、三角じょうぎ：？」

なにがどうなっているんだ？

「おつと、あぶないよ」

おもわずよろめくと、三角じょうぎがひっぱってくれた。

「机から落ちないようにね」

「はっはい：」

「さあ、そろそろはたらこうか。みんなー、朝だぞー」

三角じょうぎがさけぶと色んな文ぼう具が起きてきた。消しゴム、ボールペン、しゅうせいテープなどだ。

---

「わたしはもつと前から起きていましたからね！」

「はい、はい。さあ、みんなしごとするよ」

三角じょうぎがそう言うのとみんな書いたり、消したりと動きはじめた。

「おーい。そのえんぴつ。ちよつと手伝ってくれー」

「…あつ、はい！」

そうだわすれてた。ぼくは今、えんぴつなんだ。行ってみると三角じょうぎがいた。

「わたしがここにいるから、線を引いてくれ」

「はいっ！」

三角じょうぎに言われるまま線を引こうとしたが少しずれてしまった。

「すみません」

「いいよ、いいよ。最初はみんなそうだから」

ん？ 最初？ ずっとこのままっていうこと？

「あ、しまった。まちがえた」

ボールペンがとつぜんさけんだ。

「それなら、わたしにおまかせください！」

「あつ、でも…」

「わたしにまかせてください！ よいしょ、よいしょ」

消しゴムさんはがんばって消そうとしている。しゅうせいテープさんがいること、言いくいなあ。

「やっほー、ボールペン！」

ナイスタイミング！ しゅうせいテープさんが来てくれた。

「消しゴムさんっ！ 何してるの？」

「あつあなたはだれですか？」

---

「わたしは、しゅうせいテープだよっ！」

「しゅうせいテープさん……。あっ！」

（やっとなびいた……）

（よかった。しゅうせいテープさんが来てくれて）

みんなはコソコソ話をしているつもりだろうけど、消しゴムさんには聞こえてみたい……。

「あっ……。えっと……。しっ、しつれいしますっ！」

「あっはははは……」

楽しいな。気が付くと、ぼくはそう思っていた……。

急にぼくは宙にういた。

「……？ うわーっ！！」

ぼくがぼくに持ち上げられている？ みんなの方を見ると、みんな動いていない。そうか。人間がいる時は動かないんだ。ということとは、ぼくがいない時みんな活動しているのか。ところで、ぼくはどこに連れて行かれるんだ？

「あら。そう太、そのえんぴつもうすてるの？」

「うん。もう短いから」

えっ。ぼくすてられるの！？ ぼくはむちゅうで手からすりぬけ転がっていった。すてられるなんていやだ。まだこんなに使えるのに。

「あっ、待てー」

待つもんか。すてられたくなんかないっ！ ぼくは速度を上げて転がった。……あっ！

「ふう。やっとなつかまえた……」

いやだ、いやだ！ すてられたくないっ！！

「……！！」

ここは……。ベッドの上？ そこは、いつものぼくの部屋だった。今

---

までののは夢だったのか？

「そう太く。起きたら早く朝ごはん食べちゃいなさい」

「はくい」

あ。ぼくの勉強机に……。見るとそこには三角じょうぎなどの文ぼう具が乗っていた。

「そう太く？」

「今、行きまゝす」

三角じょうぎさんって意外といい文ぼう具なんだな。そういえば、ぼく、三角じょうぎなんてあんまり使ってなかったな。文ぼう具とすごしてあんなに楽しいなんて思ってもみなかった。これからはゼツタイ文ぼう具、大切にしよう、そう固くちかったそう太だった。

---